

離散構造の オンライン予測

畑埜 晃平

九州大学

IBIS2013 企画セッション「学習理論」

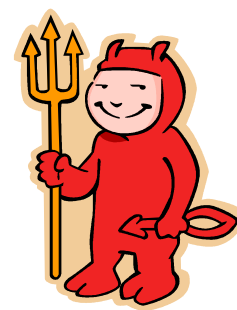
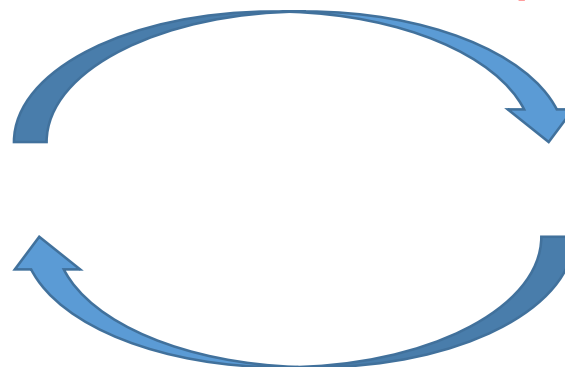
離散構造を用いた “オンライン”意思決定問題

For $t=1, \dots, T$:

離散構造 $\mathbf{c}_t \in \mathcal{C}$

(敵対的) 環境

プレイヤー



損失 $l_t(\mathbf{c}_t)$

累積損失を
小さくしたい

具体例： 資源割当, ネットワーク最適化, 最短経路,
スケジューリング, ランキング

本発表： 学習理論の立場からのサーベイ

目次

1. 離散構造のオンライン予測問題
2. 離散→連続ベクトル予測への帰着
3. オフラインーオンライン変換

例 1 : オンライン資源割当問題

For $t=1, \dots, T$ 日間:

1

バスを路線
へ割当



バス1

バス2

バス3

0.6

0.3

0.7

0.4

0.5

0.7

0.9

0.8

0.4

路線A



路線B



路線C



2

コスト
を割当

環境



3 t 日目におけるプレイヤーの損失=割当へのコストの和= $0.7+0.4+0.8=1.9$

例 1 : オンライン資源割当問題 (定式化)

For $t=1, \dots, T$:

1

割当
= 順列行列

$$c_t = \begin{matrix} & \begin{matrix} A & B & C \end{matrix} \\ \begin{matrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{matrix} & \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \end{matrix}$$

プレイヤー
(バス会社)



3 t 日目におけるプレイヤーの損失=

$$c_t \cdot l_t = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} 0.6 & 0.3 & 0.7 \\ 0.4 & 0.5 & 0.7 \\ 0.9 & 0.8 & 0.4 \end{pmatrix} = 0.7 + 0.4 + 0.8 = 1.9$$

決定空間
= 順列行列全体

$$C = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}, \dots, \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix} \right\}$$

バス1



バス2



バス3



0.6

0.7 0.3

0.4 0.5

0.7

0.9 0.8

0.4

2

コスト
= コスト行列

$$l_t = \begin{matrix} & \begin{matrix} A & B & C \end{matrix} \\ \begin{matrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{matrix} & \begin{pmatrix} 0.6 & 0.3 & 0.7 \\ 0.4 & 0.5 & 0.7 \\ 0.9 & 0.8 & 0.4 \end{pmatrix} \end{matrix}$$

環境



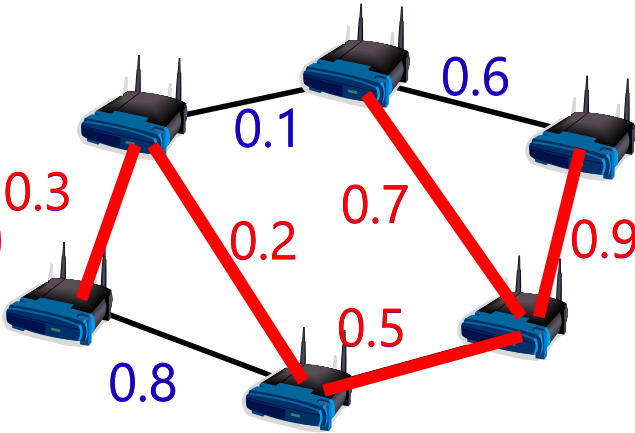
例 2 : オンラインルーティング問題

(spanning tree protocol)

For $t=1, \dots, T$ 日間:

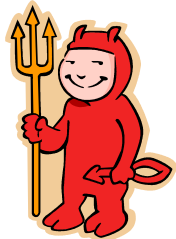
1

ループのない部分
ネットワーク
=全域木



2

遅延
を割当



環境

3

t 日目におけるプレイヤーの損失

=全域木中の遅延の総和 = $0.3 + 0.2 + 0.5 + 0.7 + 0.9 = 2.6$

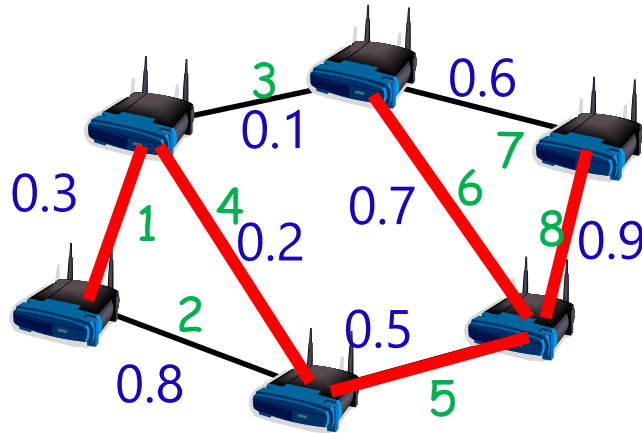
例 2 : オンラインルーティング問題 (定式化)

For $t=1,\dots,T$ 日間:

1

全域木を表現する
ベクトル

$$\mathbf{c}_t = (1, 0, 0, 1, 1, 1, 0, 1)$$



2

遅延
を割当

$$\mathbf{l}_t = (0.3, 0.8, 0.1, 0.2, 0.5, 0.7, 0.6, 0.9)$$



プレイヤー
(プロトコル)

3

t日目におけるプレイヤーの損失

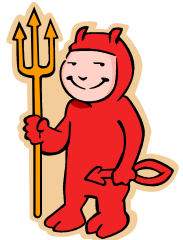
$$\mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t = 0.3 + 0.2 + 0.5 + 0.7 + 0.9 = 2.6$$

決定空間

= 全域木を表現するベクトル全体

$$C = \{(1, 0, 0, 1, 1, 1, 0, 1), \dots\}$$

環境



決定空間Cの具体例

- k-集合(要素数kの $\{1, \dots, n\}$ の部分集合)

[Warmuth, Kuzumin JMLR08][Uchiya, Nakamura, Kudo ALT10]

オンラインPCA, k-選択多腕バンディット

- 全域木

[Cesa-Bianchi, Lugosi COLT09] [Koolen, Kivinen, Warmuth COLT10] ネットワーク最適化

- 順列行列・ベクトル

[Helmbold, Warmuth JMLR09][Yasutake, H, Kijima, Takimoto, Takeda ISAAC11]

[Yasutake, H, Takimoto, Takeda ACML12][Ailon arxiv13]

資源割当, ランキング, スケジューリング

$$\text{順列行列} \quad \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \quad \text{順列ベクトル} \quad (1 \quad 3 \quad 2)$$

- s-t パス

[Takimoto, Warmuth COLT03] [Kalai & Vempala JCSS05]

[Gyorgy, Linder, Lugosi, Ottucsak JMLR07][Koolen, Kivinen, Warmuth COLT10]

最短経路

定式化：離散構造のオンライン予測問題

仮定: $C \subset R_+^n$ 離散構造のクラス (例: 順列行列全体)

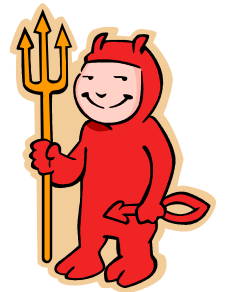
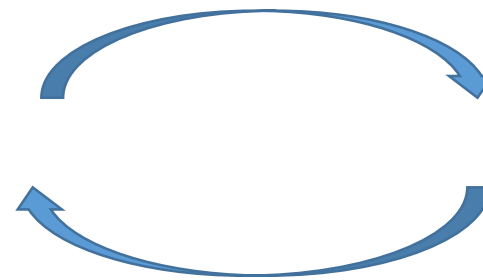
0 環境は T 個の損失ベクトル $\mathbf{l}_t$ ($t=1, \dots, T$) を **前もって決める**

For $t=1, \dots, T$

プレイヤー

1 離散構造 $\mathbf{c}_t \in C$

環境



3

プレイヤーの損失 $\mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t$

2 損失ベクトル $\mathbf{l}_t \in [0, 1]^n$

プレイヤーのゴール

$$\text{Regret}(T) = E \left[\sum_{t=1}^T \mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t \right] - \min_{\mathbf{c} \in C} \sum_{t=1}^T \mathbf{c} \cdot \mathbf{l}_t$$

リグレット

$$\text{Regret}(T) = E \left[\sum_{t=1}^T \mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t \right] - \min_{\mathbf{c} \in \mathcal{C}} \sum_{t=1}^T \mathbf{c} \cdot \mathbf{l}_t$$

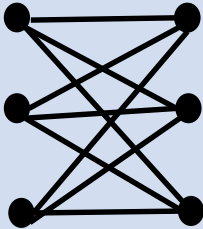
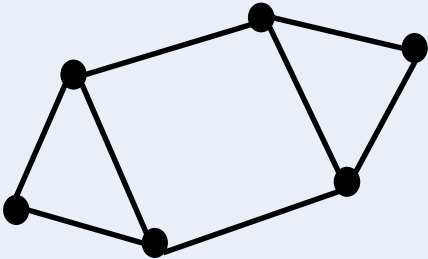
プレイヤー
(乱択アルゴリズム) の
期待累積損失

最適な固定の
離散構造の
累積損失

環境が前もって決めた (=プレイヤーの動きは見ない)
最悪のT個の損失ベクトル $\mathbf{l}_t$ ($t=1, \dots, T$) に対する評価

さらなる仮定

- 決定空間Cは“非明示的”に与えられる

明示的に与えられる情報	決定空間C（非明示的）
完全2部グラフ 	順列行列全体 $C = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}, \dots, \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix} \right\}$ 資源割当
グラフ 	全域木を表現するベクトル全体 $C = \{(1,0,0,1,1,0,1), \dots\}$ ルーティング

- 一般に $|C|$ は n に関し指数的に大

ナイーブなアプローチ

- エキスパートを用いたオンライン予測手法
 - Hedge [Freund, Schapire JCSS97]
 - 各離散構造をエキスパートとみなして予測を統合
- リグレット : $O(\sqrt{T \log |C|})$ (ほぼ最適)
- 1ステップあたりの計算時間 $O(|C|)$
 - = 一般に n に関して指数時間
 - e.g. 資源割当: $n!$

問題の難しさとその対処

1. リグレットを小さくできるか？

Yes.

連続ベクトルのオンライン予測問題に帰着可能.

既存の連続ベクトル予測手法を用いて最適なリグレットを達成

2. 効率よく予測できるか？

□決定空間Cのサイズは指数的に大

場合によってはYes (本発表のフォーカス)

目次

1. 離散構造のオンライン予測問題
2. 離散→連続ベクトル予測への帰着
3. オフラインーオンライン変換

連続ベクトルのオンライン予測

Follow the Regularized Leader (FTRL) [Hazan 11] :

$$\mathbf{w}_{t+1} = \operatorname{argmin}_{\mathbf{w} \in W} \left(\underbrace{\sum_{j=1}^t \mathbf{w} \cdot \mathbf{l}_j}_{\text{累積損失}} + \underbrace{\eta D(\mathbf{w}, \mathbf{w}_0)}_{\text{基準となるベクトルからの Bregman ダイバージェンス}} \right)$$

累積損失

基準となるベクトルからの
Bregmanダイバージェンス

多くの場合, 解析的な更新が可能

具体例 : Hedge (KL-divergence) [Freund&Schapire JCSS97],

OGD (2-norm) [Zinkevich ICML03]

リグレット : $O(\sqrt{T})$ (最適)

射影とラウンディング

$\text{conv}(C)$: クラス C の要素の凸包

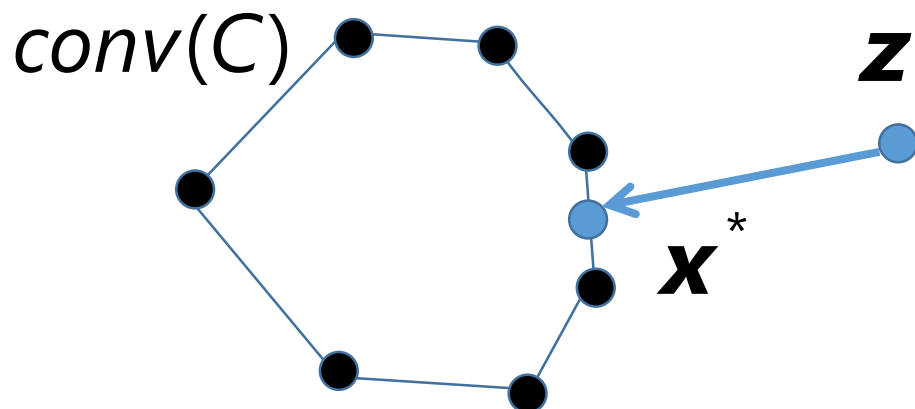
射影

入力: $\mathbf{z} \in R^n$

出力: $\mathbf{x}^* = \min_{\mathbf{x} \in \text{conv}(C)} D(\mathbf{x}, \mathbf{z})$

D : Bregmanダイバージェンス

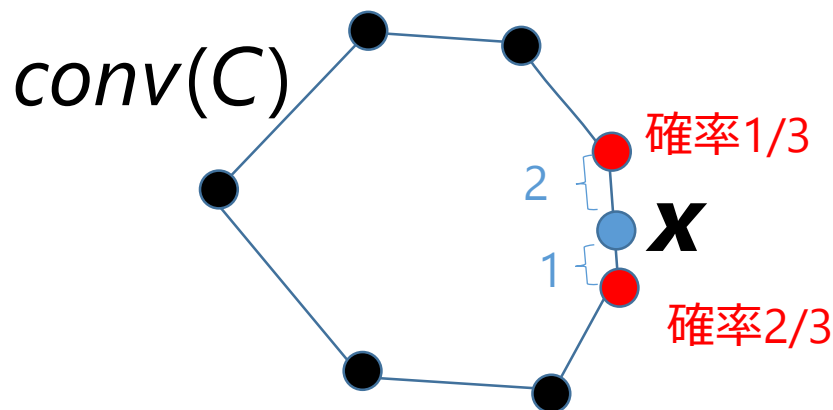
(2 ノルム距離, KLダイバージェンス等)



ラウンディング

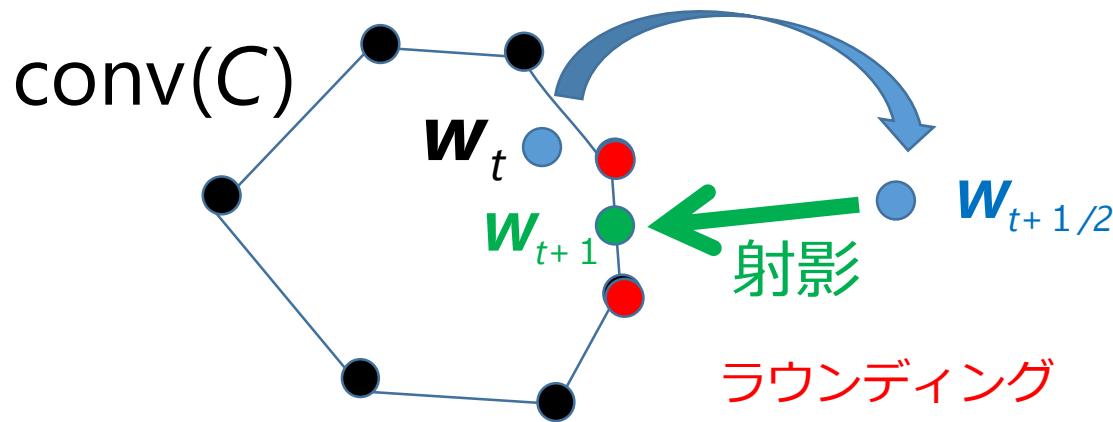
入力: $\mathbf{x} \in \text{conv}(C)$

出力: $\mathbf{c} \in C$ s.t. $E(\mathbf{c}) = \mathbf{x}$



FTRL+射影+ラウンディング = $O(\sqrt{T})$ リグレット

FTRLによる更新



ラウンディングの性質 損失を保存

$$E(\mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t) = \mathbf{w}_t \cdot \mathbf{l}_t$$

離散→連続への
帰着

離散構造の期待損失

conv(C)上のFTRLの損失

射影の性質

リグレットを保存

$$\left(\text{conv(C)上の FTRLのリグレット} \right) \leq \left(\text{射影なしの FTRLのリグレット} \right) = O(\sqrt{T})$$

$C = \{\text{順列行列}\}$ の場合(1) : 射影

[Helmbold, Warmuth JMLR09]

- 2重確率行列 : 各列・行の総和が1となる正方行列
- [Birkoffの定理] 任意の2重確率行列は順列行列の凸結合で表せる

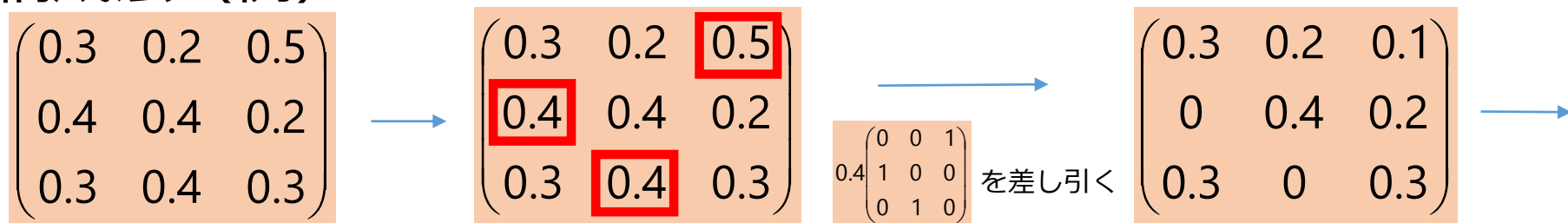
$$\begin{pmatrix} 0.3 & 0.2 & 0.5 \\ 0.4 & 0.4 & 0.2 \\ 0.3 & 0.4 & 0.3 \end{pmatrix} = 0.4 \begin{pmatrix} & & 1 \\ 1 & & \\ & 1 & \end{pmatrix} + 0.3 \begin{pmatrix} 1 & & \\ & 1 & \\ & & 1 \end{pmatrix} + 0.2 \begin{pmatrix} & 1 & \\ & & 1 \\ 1 & & \end{pmatrix} + 0.1 \begin{pmatrix} & & 1 \\ & 1 & \\ 1 & & \end{pmatrix}$$

- [系] $\text{conv}(C) =$ 2重確率行列全体 (Birkoff polytope)
- $\text{conv}(C)$ 上の射影 $\Rightarrow$ $2n$ 個の線形制約つき凸最適化
- $\text{conv}(C)$ へのKLダイバージェンス射影:
Sinkhorn balancing, 計算時間 $\tilde{O}(n^6)$

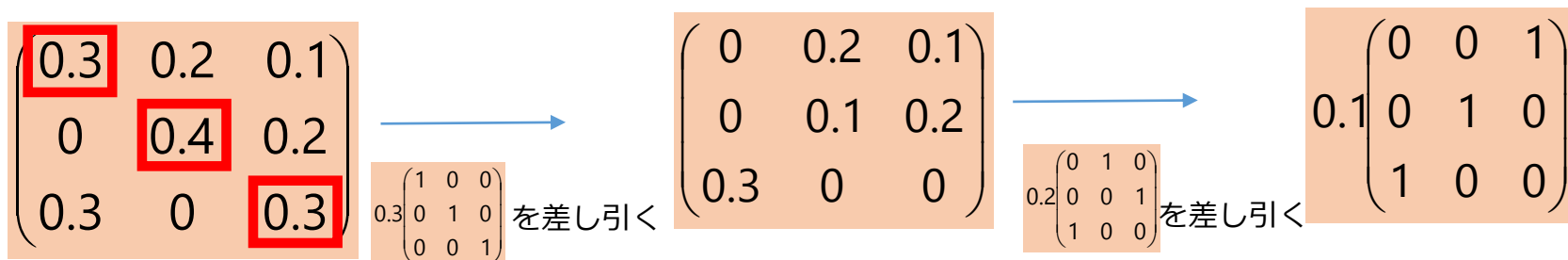
順列行列の場合(2)：ラウンディング

[Helmholtz, Warmuth JMLR09]

- [Birkoffの定理, 再掲] 任意の2重確率行列は順列行列の凸結合で表せる (存在性)
- 構成法 (例) :



□ は2部グラフ上の完全マッチングに対応
 $O(n^3)$ 時間で求まる(Hungarian法など)



- 1ステップ $O(n^3)$ 時間, n^2 回の繰返し → 全体 $O(n^5)$ 時間

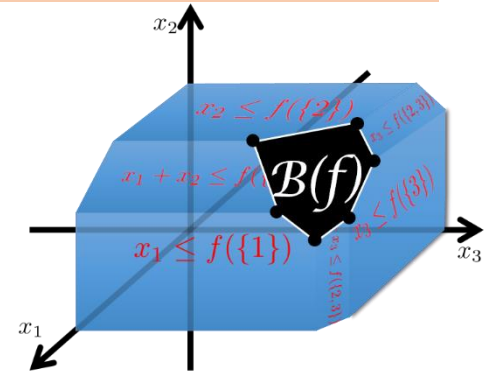
全域木・その他の場合

[Suehiro, H, Kijima, Takimoto, Nagano ALT12]

- 基多面体 $B(f)$...劣モジユラ関数 $f:2^{\{1,\dots,n\}} \rightarrow \mathbb{R}$ によって定義される多面体:

$$B(f) = \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \forall S \subseteq \{1, 2, \dots, n\}, \sum_{i \in S} x_i \leq f(S), \sum_{i \in \{1, 2, \dots, n\}} x_i = f(\{1, 2, \dots, n\}) \right\}$$

$\text{conv}(C) = B(f)$ となる決定空間 C の例：
全域木, k -set, 順列ベクトル



基多面体 $B(f)$ への射影・ラウンディング： $O(\text{poly}(n))$ 時間
特に $f(S) = g(|S|)$ の場合 (k -set, 順列ベクトル)： $O(n^2)$ 時間

ここまでのまとめ&議論

射影・ラウンディングが計算できれば
離散構造に対する最適なリグレットを達成

問題点

- $\text{conv}(C)$ の射影・ラウンディングがNP困難となる
離散構造のクラス C が多数存在
 - オンライン集合被覆問題, オンラインMAXSATなど
- 離散構造ごとに射影・ラウンディングの設計が必要

ではどうする？

- 目標を弱める： α -リグレット
- “オフライン→オンライン変換”
 - 対応するオフライン手法があればオンライン手法に変換できる

目次

1. 離散構造のオンライン予測問題
2. 離散→連続ベクトル予測への帰着
3. オフライン－オンライン変換

オフライン近似アルゴリズムを用いた 離散構造のオンライン予測問題

オフライン問題

$\text{OPT}(C)$

入力: $\mathbf{l} \in [0,1]^n$

出力: $\mathbf{c}^* = \arg\min_{\mathbf{c} \in C} \mathbf{c} \cdot \mathbf{l}$

例:

集合被覆問題 (配送計画)

MAXSAT (制約充足)

ランク統合問題 (ランキング)

オンライン問題

プレイヤー



$\mathbf{l} \in [0,1]^n$



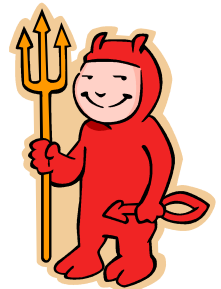
OPT (C)の
 α 近似
アルゴリズム

$\mathbf{c}$ s.t.

$\mathbf{c} \cdot \mathbf{l} \leq \alpha \arg\min_{\mathbf{c}' \in C} \mathbf{c}' \cdot \mathbf{l}$

1 離散構造 $\mathbf{c}_t \in C$

環境



2 損失ベクトル $\mathbf{l}_t \in [0,1]^n$

3 プレイヤーの損失 $\mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t$

プレイヤーの目標

α -リグレットの最小化 (なるべく小さい $\alpha \geq 1$ に対して)

$$\alpha\text{-Regret}(T) = E \left[\sum_{t=1}^T \mathbf{c}_t \cdot \mathbf{l}_t \right] - \alpha \min_{\mathbf{c} \in \mathcal{C}} \sum_{t=1}^T \mathbf{c} \cdot \mathbf{l}_t$$

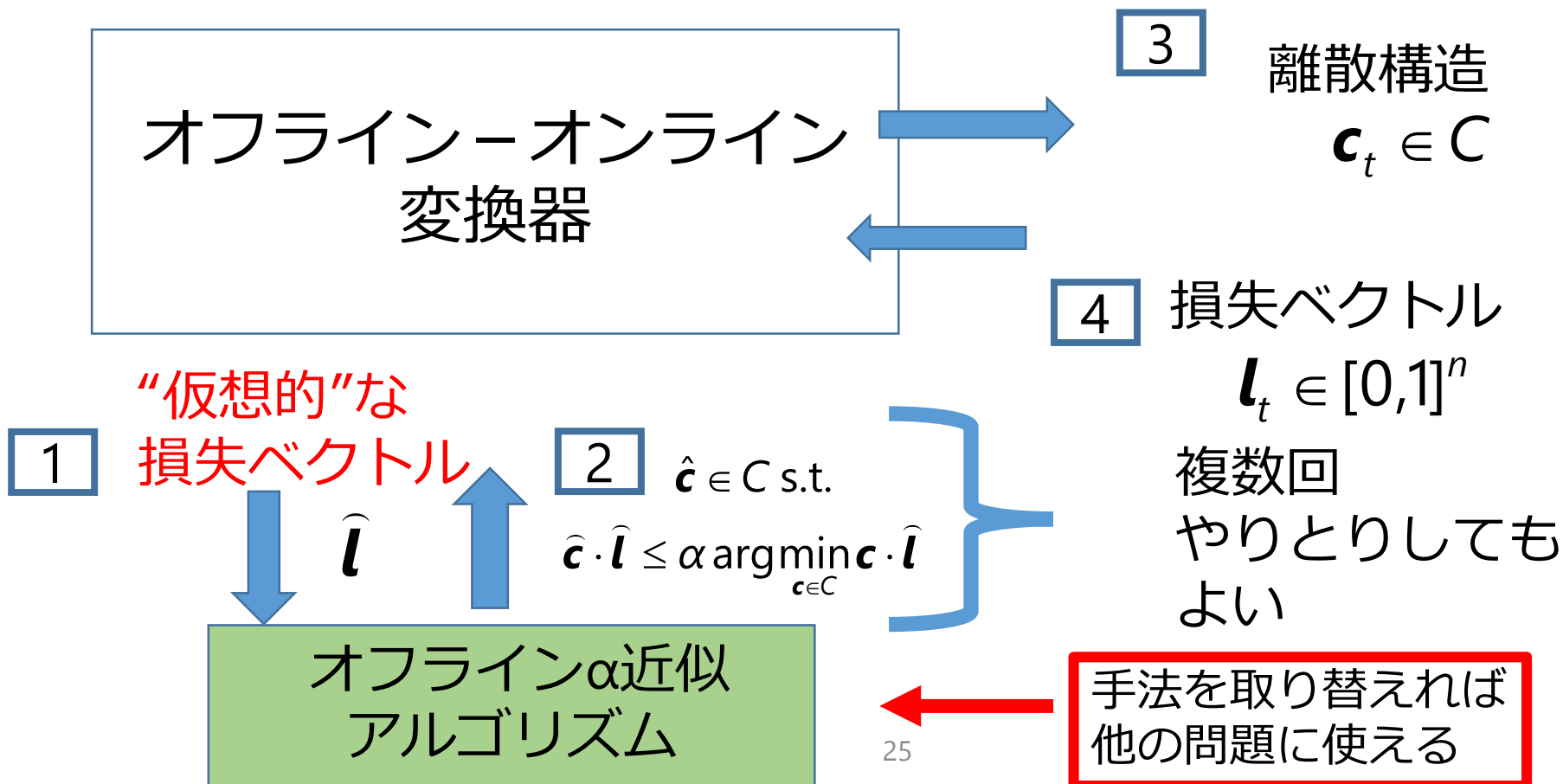
プレイヤーの
期待累積損失

最適な固定の
離散構造の
 α 近似による
累積損失

※リグレット=1-リグレット

“オフライン–オンライン”変換

= オフライン近似アルゴリズムをオラクルとして用いた
オンライン予測手法



オフラインーオンライン変換手法

- Follow the Perturbed Leader (FPL) [Kalai, Vempala JCSS05]
 - オフライン最適化アルゴリズム ($\alpha=1$) を用いる
 - $1\text{-regret}(T)=O(\sqrt{T})$ (ただし $\alpha\text{-regret}(T)=O(\alpha^T \sqrt{T})$)
 - 一般にFTRLより若干リグレットは悪化
 - 試行毎の計算時間: $O(n)$
- Kakadeらの手法 [Kakade, Kalai, Ligett SICOMP09]
 - オフライン α -近似アルゴリズムを用いる
 - $\alpha\text{-regret}(T)=O(\sqrt{T})$, 計算時間: $\text{poly}(n)T$
- Fujita-H-Takimoto [Fujita, H, Takimoto ALT13]
 - オフライン近似アルゴリズムが緩和に基づく (自然な仮定)
 - $(\alpha+\epsilon)\text{-regret}(T)=O(\sqrt{T})$, 計算時間: $\text{poly}(n, 1/\epsilon)$ (T に依存しない)

準備：Frank-Wolfe 法

[Frank,Wolfe56][Jaggi ICML13]

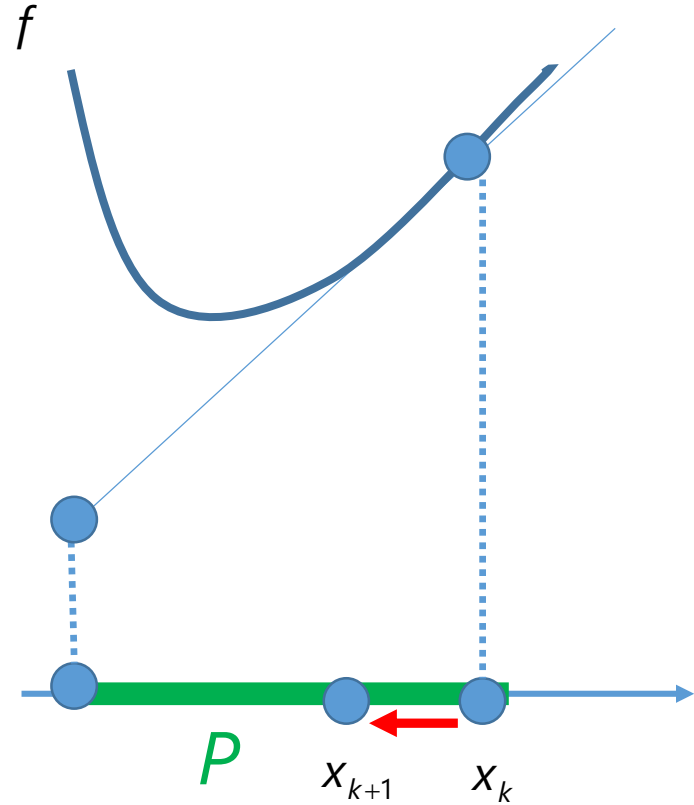
線形最適化手法を用いた凸最適化手法

$$\min_{\mathbf{x} \in P} f(\mathbf{x})$$

Frank-Wolfe

For $k=1, \dots, K$

- $\gamma_k = 2/(k+2)$
- $\mathbf{x} = \operatorname{argmin}_{\mathbf{x} \in P} \mathbf{x} \cdot \nabla f(\mathbf{x}_k)$
- $\mathbf{x}_{k+1} = (1 - \gamma_k)\mathbf{x}_k + \gamma_k \mathbf{x}$



定理

FW 法は $K = O(1/\varepsilon)$ ステップで ε 近似解を出力

Kakade+ : FW+近似アルゴリズム

[Kakade, Kalai, Ligett SICOMP09]

着眼点

$$\hat{\mathbf{c}} \cdot \hat{\mathbf{l}} \leq \alpha \argmin_{\mathbf{c} \in C} \mathbf{c} \cdot \hat{\mathbf{l}} = \argmin_{\mathbf{c} \in \alpha C} \mathbf{c} \cdot \hat{\mathbf{l}}$$

近似解 $\hat{\mathbf{c}} \approx \text{conv}(\alpha C)$ の端点

$\text{conv}(\alpha C)$ への射影を求める

$$\min_{x \in \alpha \text{conv}(C)} f(x) = D(x, z)$$

For $k = 1, \dots, K$

a. $\gamma_k = 2 / (k + 2)$

b. $\hat{\mathbf{c}} = \argmin_{\mathbf{c} \in \alpha C} \mathbf{c} \cdot \nabla f(\mathbf{x}_k)$ α 近似アルゴリズムで解く

c. $\mathbf{x}_{k+1} = (1 - \gamma_k) \mathbf{x}_k + \gamma_k \hat{\mathbf{c}}$ (実はラウンディング)

$\text{conv}(\alpha C)$ への射影・ラウンディングが同時に求まる

まとめ・今後の課題

まとめ

- 離散構造のオンライン予測
- FTRL+射影+ラウンディング
- オフラインーオンライン変換

Take Home Message: 決定の候補が指数的に多くても
効率的にオンライン予測可能 . . . な場合もある

Open Problems

- 非線形な損失関数
- より効率的な手法
 - 緩和を仮定しない計算時間 $\text{poly}(n)$ のオフラインーオンライン変換は可能か？
- 確率的バンディット設定への拡張
- 応用